

13 CINに対する根治的高周波円錐切除術の診断的並びに治療的意義に関する研究

大阪 谷口病院

谷口 定之、永松 晃、昇 幹夫

〔目的〕 CINを如何に取扱うかと言う問題は未だ論議のあるところであるが、我々はCINに対し積極的に円錐切除を行うことで、3次検診としての診断的意義と、CINの段階で治療を行って初めて癌予防が実現するものであることを実証したい。〔方法〕独特な高周波円錐切除器を試作し、先ず電氣的円錐切除を行い、次いで切除断端部に高周波凝固を行うという方法を行った。鋭利な電氣的円錐切除によって連続切片による病理組織診を可能とし、次いで行う高周波凝固によって切離面の止血と病巣遺残を凝固壊死することによって根治性を高めた。〔成績〕当院において行った200余例の高周波円錐切除を行った症例について、円錐切除前のコルポスコープ下におけるmultiple狙い biopsyの組織診と、円錐切除による組織診との対比を行った結果、2次検診において良性異形と診断された44例中1例に上皮内癌、1例に浸潤癌を認め、軽度異形成と診断された64例中2例に上皮内癌を、中等度異形成と診断された29例中1例に上皮内癌を、1例に浸潤癌を認めるなど、可成り著しい不一致例を認めた。次いで200余例に対する追跡調査から、浸潤癌のうちIb occの3例を除き、すべての症例で増悪傾向特に癌化したものは認めなかった。〔結論〕本法は、CINの診断的並びに治療的の両目的を同時に達成することの出来る方法であり、かつ極めて安価であり、入院の必要もなく、通院で治療可能であることから、レーザーやその他の高価な機械を持たない診療所或いは中、小病院でも円錐切除術を行うことを可能にすることによって、癌検診の精度を高めると同時にCINの治療に際し、臓器温存の可能性を高めた。

14 子宮頸部上皮内新生物に対する大口径ループ型電極を用いた移行帯切除術(LLETZ)の臨床経験およびその有用性に関する検討

大田原赤十字病院

小林陽一、鈴木 淳、北岡芳久、強口芳明、白石 悟

〔目的〕子宮頸癌において、進行癌は減少傾向にある反面、若年者における子宮頸部上皮内新生物(CIN)は増加する傾向にあり、子宮温存手術の要求が増加している。今回我々は大口径ループ型電極を用いた移行帯切除術(Large Loop Excision of the Transformation Zone; LLETZ)を臨床的に経験する機会を得たので、その手技や適応につき検討した。〔方法〕高度異形成8例、上皮内癌23例を対象とし、摘出組織の病理診断、組織断端における病変の有無や移行帯まで切除されているか否かを、術前の組織診断や病変の占拠範囲別に検討した。なお手技の確立および適応症例の決定のため、本法導入当初の上皮内癌17例に対し、YAGレーザーによる円錐切除を追加し、追加切除組織における病変の遺残の有無を検討した。また従来より行っているYAGレーザーとの比較も行った。〔成績〕YAGレーザーによる追加切除を行った症例のうち、頸管内の奥深くに病変が存在した1例において追加切除組織に病変の遺残が認められた。また、摘出組織断端における病変の有無や、移行帯まで十分に切除されているか否かの検討では、頸管内奥深くに病変の存在する症例のみならず、病変の一部が頸管内に及ぶ症例においても、摘出組織の奥行きが不十分と思われる症例が比較的高率に認められた。YAGレーザーと比較して、機器が安価、手技が容易、出血量が少ないなどの長が認められた反面、摘出組織の奥行きが不十分であったり、摘出組織の病理学的再構築が困難である症例が認められた。〔結論〕病変全体が可視領域に局限するCINの症例に対し、LLETZは有用な保存的手術になり得る可能性が示唆された。